

# 連載講座 カトリック教会と音楽 第1回

永原恵三

## 講座のはじめに

今月からこのホームページ上で、「カトリック教会と音楽」というタイトルで、連載講座をはじめます。この内容は、カトリック浅草教会の『教会報』で連載している「教会と音楽」と少々重なりますが、むしろ一般社会の方々を対象とした教養講座とお考えください。

キリスト教のなかでもカトリック教会の音楽については、一般的に知られていたり演奏されたりすることが多くある一方で、知識や情報が偏っていることが多いように思えます。この講座では歴史的経緯も踏まえて現在のカトリック教会における音楽について、宗教的な問題というよりも、私の専門である音楽学という学問の立場からお話いたします。

ところで、音楽学という学問の名称は、日本の社会でほとんど知られていない、というのが現状だと思います。大学のなかでも専門分野が異なれば、まったくと言ってよいほどに音楽学が学問であることの認識は少ないです。初めてお話をした時に、よく尋ねられるのが、「どんな楽器をなさるのですか」という質問です。つまり、演奏者として認識されるのです。私の場合は学問と演奏の二足のわらじを履いていますので、それはそれでよいのですが、普通、学者に対しては「どんなご研究をなさっておられるのですか」という質問が普通です。

それでは、私はどんな研究をしているのか、それは本ホームページのプロフィールをご参照いただければ幸いですが、音楽美学に始まり、20世紀を代表する作曲家である柴田南雄とその合唱作品（シアター・ピース）の研究、観光と音楽、民俗芸能と民謡、カトリック教会の音楽、など、長い間研究者をしていると、専門とは言え様々な内容の研究をします。私は、海外の研究者に多くあるように、少しずつ研究対象や方法を変えています。しかし、それぞれをずっと並行して考え続けている、というのが実際だと思います。

もちろん、これでは答えになりませんので、今までの研究や今後のことを総括する分野があるとなれば、音楽の哲学、がもっとも相応しいと思います。音楽とは何か、という問いがありますが、いきなりそれでは雲をつかむようなものです。なので、具体的に様々な音楽の事例、あるいは事実、さらには現実、について考察し、人間の営みとしての音楽というスタンスで、音楽から人間あるいはひとについて考えています。

前置きが長くなりましたが、この講座では音楽学のなかで、これまでは音楽史や民族音楽学などで捉えられてきた「儀礼と音楽の関わり」という大きな学問的脈絡を保ちながら、カトリック教会の音楽についてお話をしてまいります。本講座では、キリスト教やカトリック教会という大きな共同体における様々な営み、たとえばミサ聖祭、典礼暦（教会暦）、典礼（儀式）、生活や文化などと音楽とのつながりを、具体的に考えてまいりたいと思います。

なお、宗教的宣伝、教えを広める、宣教、などの意図は全くありませんし、宗教的な議論をするつもりも全くありませんので、誤解のなきようお願いいたします。

## 第1回 アヴェ・マリアの音楽

### はじめに典礼暦（教会暦）を少しだけ

キリスト教の教会音楽を語るにあたって、まず知っておいていただきたいのが、「典礼暦（教会暦）」というキリスト教の暦です。同じキリスト教でもカトリック教会と他のプロテスタント教会や英国国教会、など様々な宗派によって、多少の違いがあったり、日本語での表記が異なっていたりしますが、大枠は同じと考えられます。本講座では、便宜上、カトリック教会の暦の考え方に依拠します。また、典礼暦についてのもう少し詳しいお話しは別の機会にします。

カトリック教会の1年は、12月25日の主の降誕と3月から4月に毎年移動する復活の主日（春分の日の後の最初の満月の後の最初の日曜日）という二つの大きな祝日が軸になっています。2021年の典礼暦は、巻末資料「カトリック中央協議会」による「2021年度典礼暦」をご覧ください。

2021年度の始まりは、2020年11月29日（日）待降節第1主日です。これは主の降誕から4週間前の日曜日にあたります。そして、この年度の終わりは、2021年11月21日（日）王であるキリストの祭日です、と言いたいところですが、厳密には、1週間は日曜日から始まりますので、21日から始まる週の土曜日の日没までを指します。日没以降は日曜日となるので、2022年度の待降節第1主日となります。東京カテドラルでもあるカトリック関口教会が土曜日の18時のミサを翌日曜日の主日のミサとしてYouTubeで配信しておられましたが（現在は日曜日のミサをオンラインで配信しておられます）、その理由は暦の考え方から来ています。ですから、同様に、一般にクリスマスイブの12月24日の夜のミサが盛大に催されたりしますが、それは12月25日の主の降誕のミサのうち、「夜半のミサ」にあたります。12月25日には「日中のミサ」が行なわれます。ただ単に、2回ミサがあるのではなく、ミサの内容（読まれる聖書の箇所や聖歌）が異なっているのです。復活の主日についても同様で、土曜日の夜に行なわれる復活徹夜祭と日中の復活の主日のミサとは内容が異なります。

このように考えていくと、一見煩雑に思われるでしょうし、形式にとらわれている、という批判も表面的にみればあって当然かもしれません。しかし、私たちが毎日毎日を単純な繰り返しとして過ごしていないのと同様に、教会もまたその営みは毎日同じではありません。ミサは毎日行なわれるものであって、日曜日にだけ行なわれるものではありません。毎日、聖書の朗読箇所や聖歌はこの典礼暦にしたがって異なっているのです。

### 聖母マリアの祝日（祭日）

典礼暦をざっとみるだけでも、1年にわたってキリストの言行に関係する日だけでなく、聖母マリアや聖ヨセフや聖ヨハネなど様々な聖人の祝日や、教義に基づいた祝日などがあることがお分かりになると思います。こうした祝日などと音楽の結びつきは強いので、今後の回で少しずつお話ししてまいります。

今回は、聖母マリアについてどのような祝日があるのかを、追っていきます。今月は10月ですが、カトリック教会では10月を「ロザリオの月」と呼んでいます。典礼暦をみると、10月7日がロザリオの聖母の日にあたります。また、5月を聖母月と呼びます。5月31日が聖母の訪問の祝日です。8月には聖母被昇天が15日にあり、9月は14日が十字架称賛で15日は悲しみの聖母と

続きます。11月は21日が聖母マリアの奉獻、12月8日は無原罪の聖マリア、年が明けて1月1日は神の母聖マリア、そして、3月25日は神のお告げ、と年中、聖母に関連する祝日があります。

## アヴェ・マリアの祈り

「アヴェ・マリア」は本来祈りですので、通常は言葉で唱えられます。古い信徒の方々は「天使祝詞」として馴染んでおられると思います。日本語の祈りの言葉は少しずつ変更されてきていますが、現在の日本語は以下の通りです。

ラテン語と日本語（現在のカトリック教会で用いられている祈り）を記します。

Ave Maria, gratia plena	アヴェ・マリア、恵みに満ちた方
Dominus tecum:	主はあなたと共におられます。
benedicta tu in mulieribus,	あなたは女のうちに祝せられ
Et benedictus fructus ventris tui Iesus.	ご胎内の御子イエスも祝せられました。
Sancta Maria, mater Dei,	神の母聖マリア
ora pro nobis peccatoribus	私たち罪人のために
nunc et in hora mortis nostrae.	今も死を迎える時もお祈りください。
Amen.	アーメン。

この祈りは、二つの部分から成り立っています。前半の4行はルカによる福音書第1章28節のお告げの天使による祝いの言葉が2行、続いての2行は、同じく42節の親族エリザベトからマリアへの祝いの言葉です。そして、後半のSancta Maria以降の4行は、マリアへの祈願にあたります。この前半と後半とは成立時期が異なっていて、前半部分は6世紀頃から東方教会で歌われていて、西欧では、7世紀のローマ典礼書に、神のお告げの祭日、待降節第4集の水曜日、待降節第4主日のミサ中の奉納唱として記されている（鈴木忠一 1996 『カトリック大事典第1巻』：32頁、東京：研究社）という記録が残っているようです。後半部の祈願の部分については、野村良雄、土屋吉正両氏によれば、1440年頃のシエナのフランシスコ会士、聖ベルナルディヌスによって加えられた（野村；土屋 1981 『音楽大事典』：6頁、東京：平凡社）、とされます。公式には1568年教皇ピウス5世の聖務日課書改訂で最終決定されました（鈴木 同上）。第二バチカン公会議以前のグレゴリオ聖歌集である”Liber Usualis”（以下LU：頁）では、おそらく10世紀頃の旋律で神のお告げの祭日（LU：1416）、奉納唱の（LU：1318）、（LU：355）に前半部分のみの聖歌がみられ、現在の後半も含めた聖歌は（LU：1861）です。

現在の私たちに馴染みの深いアヴェ・マリアの旋律（現在『カトリック聖歌集』541の楽譜）が16世紀に確定されたものだとすると、それはかなり新しいことになります。また、前半部だけの古い旋律は、メリスマ的（一つの音節を多数の音で長く伸ばして歌う）で、天使とエリザベトそれぞれの祝いの言葉を、豊かな旋律で彩っていると言えましょう。それに対して、新しい方の旋律は、まったく対照的にシラビック（一音節に一音符が対応）で、言葉をはっきりさせて歌うようになっていて、伝統的な賛歌のスタイルを取っているとも言えます。

## 《アヴェ・マリア》の音楽

アヴェ・マリアの祈りはグレゴリオ聖歌だけでなく、いつの世にも作曲家たちの靈感を揺さぶるものであったに違いありません。数多くの曲が作曲されており、それらは典礼暦の聖母マリアの日だけでなく、毎日の祈りのなかでも唱えられたり歌われたりします。このように、アヴェ・マリアの祈りは典礼暦に基づきつつ、なおも、日々の祈りとしても人びとを支える祈りです。

アヴェ・マリアの音楽は、16世紀から17世紀のルネサンスの作曲家、ジョスカン・デ・プレ Josquán Desprez(1440頃-1521) やビクトリア Tomás Luis de Victoria(1548-1611)などによる優れた楽曲があります。なかには作曲の真偽の判断が難しい曲もあるようです。

さて、時代が少し飛びますが、多くの《アヴェ・マリア》のなかでも一般社会の皆さんに馴染みのあるのが、フランツ・シューベルト Franz. Peter Schubert (1797-1828) によって作曲された歌曲でしょう。ほかに、シャルル・グノー Charles François Gounod (1818-1893) による曲も有名です。あとは、合唱を愛好する方々では、ジャック・アルカデルト Jacques Arcadelt (1504/5-1568)作曲とされる曲も馴染みがあると思います。その他、多くの西洋の過去から現在にかけての作曲家の手によって、ほぼ同じテキスト（歌詞）に、時代の様式に応じて作曲されてきました。ちなみに、現代日本の作曲家では、ドイツを中心に活躍している細川俊夫（1955生まれ）が、混声合唱のための《Ave Maria》（1991）を現代的手法で作曲しています。

ところで、シューベルトの曲はスコットの『湖上の美人』と言うドイツ語の詩に作曲されたもので、歌詞そのものは本来別物ですが、ラテン語の歌詞に置き換えて演奏されることも多いです。グノーの作品は、ご存知のようにJ.S.バッハ Johann Sebastian Bach(1685-1750) の〈平均律クラヴィーア曲集第1巻〉前奏曲ハ長調の旋律を付加した曲です。また、アルカデルトの作品は、専門家が聴けばすぐわかることですが、19世紀の音楽家が当世風の和声進行で編曲したものです。アルカデルトは16世紀の人で音楽様式がまったく異なっていて、原曲は愛だの恋だのを歌った世俗曲です。さらに、近年とてもよく歌われている、カッチーニ Caccini の《アヴェ・マリア》はこちらも、カッチーニは16世紀から17世紀に活躍したイタリア人で、ソ連時代のウクライナの作曲家がカッチーニに名前を借りて書いたことが明らかになってきています。

このようにお話ししていくと、《アヴェ・マリア》の歌はかなり屈折した経緯を経ているように思いがちですが、大切なことは、どの曲もその美しい旋律ゆえに多くの人びとに感動を与え続けたことです。逆に、この美しい旋律の歌詞は、アヴェ・マリア以外にはないと思えるような、すばらしい旋律だったのではないのでしょうか。美しい音楽やすてきな音楽、楽しい音楽など、気に入った旋律は、いろいろな歌詞で替歌にすることが日常的にあるように思います。だから後世の人びとにいろいろな靈感をもたらしたのが、《アヴェ・マリア》の祈りであり、言葉であり、その旋律だったのかもしれない。

## 現代のカトリック教会では

現代のカトリック教会では、1962年から65年にかけて開催された第二バチカン公会議の後に、大きな改革があり、ラテン語だけではなく、現地語に翻訳された祈りが唱えられ、現地語で作曲された聖歌が歌われています。グレゴリオ聖歌を歌っている教会はほとんどありません。（このことも今後詳しくお話しします）。日本では、合唱曲の《水のいのち》で有名な高田三郎氏や新垣壬敏氏を中心とした日本人による聖歌が歌われています。《アヴェ・マリア》の祈りも同様に、日本語のすばらしい曲がいくつも書かれています。